

分娩管理の胎児予後改善効果確立に関する研究、および最新の分娩管理技術に関する研究

前田 一雄・諸橋 侃
寺尾 俊彦・新井 正夫
中野 仁雄

合同統一研究（文献検索）

今日、胎児心拍数図と陣痛曲線の記録を主とする分娩監視ならびに胎児管理の効果に関しては、既に一般に広く認められているところであるが、本研究開始の当時、Haverkamp,^{1),2)} Kelso,³⁾ Renou⁴⁾ の、3名の否定的報告があったので、妊娠分娩時胎児管理が文献上どのように研究されているかを知るため、JOIS端末を用いてMEDLARS データバンクを検索したところ、1975-1980年の6年間に出版された諸外国の関連文献は14,516であり、本研究班で文献調査表を作成して検討したが、整理には3960人日の労作を必要とし、調査内容はコンピュータファイルに保存した上で、さらに分類と検索を行ったところ、この6年間だけでも後年になるほど文献数は急増し、諸外国でも胎児管理が重視されていることが明らかであった（図1）。また、年度毎に内容を分類すると、最近は予後に関する研究が多くなっていて（図2）、したがって研究は進展を続けており、分娩時胎児管理の必要性は益々高まっているといえる。

一方、南カリフォルニア大学のQuilligan⁵⁾によると、Haverkamp その他の研究で胎児管理の効果が無いように言っているのは例数が少ないための誤りであり、Quilliganの、11万例をこえる分娩の検討では、胎児監視(electronic fetal monitoring)を行った群ではハイリスク例が多いにもかかわらず周産期死亡が有意に少なく、分娩

時胎児監視の効果は明らかに認められ、しかも帝王切開率は増加していなかった。NIHから出版された「Antenatal Diagnosis」と題する報告書でも⁶⁾この点は同様に明らかに有効とされている。分娩管理に対する否定的意見は、文献数からみてもしたがって全くの少数であり、しかもQuilliganの言うように症例数が少ないための誤りをおかしているものとするれば、もはやこれを取り上げる必要はなく、分娩時胎児管理はさらに大いに推進すべきである。さらに、従来的一般的方法だけでなく、本研究班で検討を進めているような最新の研究も非常に意義があり、その成果は一般的指導にも十分に反映されてよいものと考えられる。

文 献

1. Haverkamp, A. D. et al. ; Am. J. Obstet. Gynecol. 125, 310. 1976.
2. Haverkamp, A. D. et al. ; Am. J. Obstet. Gynecol. 134, 399. 1976.
3. Kelso, I. M. et al. ; Am. J. Obstet. Gynecol. 131, 526. 1978.
4. Renou, P. et al. ; Am. J. Obstet. Gynecol. 126, 470. 1976.
5. Quilligan, E. J. ; 日本新生児学会雑誌 18, 1, 1982.
6. National Institute of Health ; Antenatal Diagnosis. 1979.

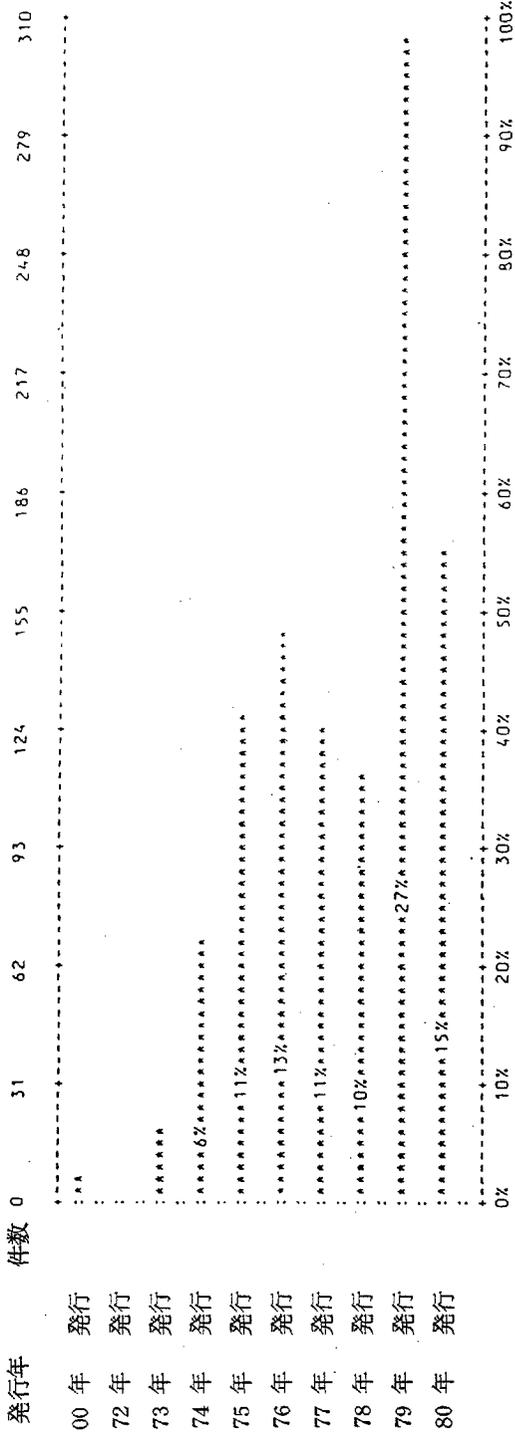


図 1 胎児監視関係の文献数の年代別分布

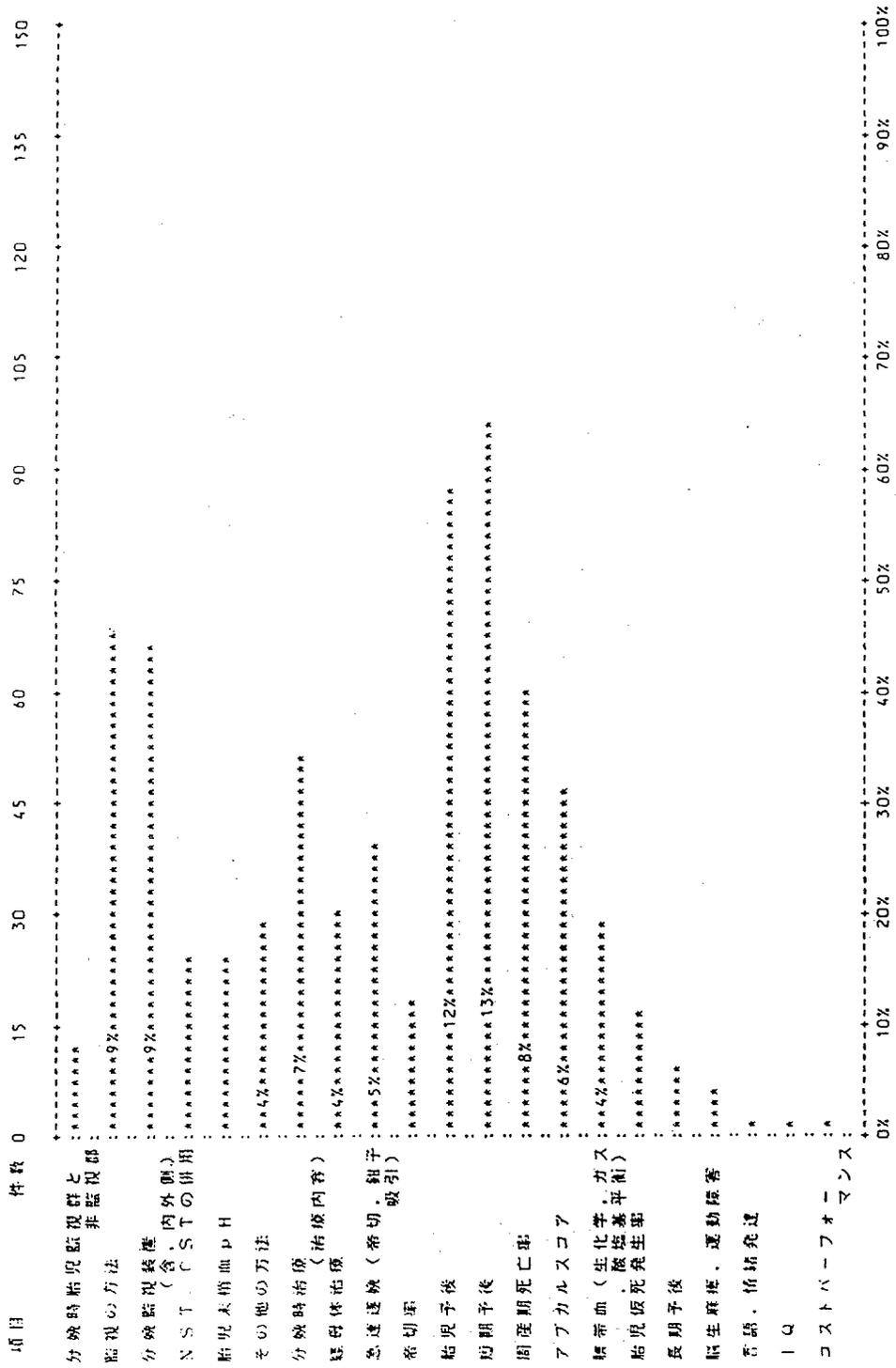
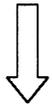


図2 項目別の文献数分布 (1980年)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



合同統一研究(文献検索)

今日,胎児心拍数図と陣痛曲線の記録を主とする分娩監視ならびに胎児管理の効果に関しては,既一般に広く認められているところであるが,本研究開始の当時 Haverkamp, Kelso, Renou の,3名の否定的報告があったので,妊娠分娩時胎児管理が文献上どのように研究されているかを知るため,JOIS 端末を用いて MEDLARS データバンクを検索したところ,1975-1980年の6年間に出版された諸外国の関連文献は14,516であり,本研究班で文献調査表を作成して検討したが,整理には3,960人目の労作を必要とし,調査内容はコンピュータファイルに保存した上で,さらに分類と検索を行ったところ,この6年間だけでも後年になるほど文献数は急増し,諸外国でも胎児管理が重視されていることが明らかであった(図1)。また,年度毎に内容を分類すると,最近は予後に関する研究が多くなっていて(図2),したがって研究は進展を続けており,分娩時胎児管理の必要性は益々高まっているといえる。